

中学生の人間関係構築と学びの変化の関連性について

Study on cooperative Relation and Learning in Junior High School

学習臨床コース 学習過程臨床分野

m135049J 辺土名 智子

指導教官 西川 純

【キーワード】 人間関係構築 コミュニケーション 学び合い グループ学習

1. 研究の背景と目的

学び手は受動的な存在であり、しかも有能ではない、という立場に立つ伝統的学習観のもとでは、教育は教師による教え込みや学習の管理に終始してきた。しかし、理解のための心的余裕があれば人は知的好奇心に基づく能動性を発揮し、さらには学び手の必要に応じて最小限の援助だけを与えることができ、他者との関わりが学びに対する能動性の増幅を招くとして、優れた学習環境である他者の存在が挙げられている。また、学びそのものが、教師-生徒間の関係にとどまるものではなく、生徒-生徒間の関係によっても発展していくことが認知科学研究により広く認められるようになった。¹⁾

多くの学習場面において、話し合い活動やグループ学習を取り入れることを目的に、生徒間の相互作用やそれに伴う相互理解を通しての学習の深まりを挙げることは多い。しかし、授業中に生じる教師の意図に沿わない生徒の自由なコミュニケーションは教育指導の対象になり抑制される。また、グループ学習形態でありながら、学習者間の関係によっては、役割分担がなされて学習が個別化し、その成果も個別の成果の羅列となる場合も多い。さらに、学習者同士が互いの意を汲み合わないまま学習が進むこともある。

近年、生徒は有能な学び手であると同時に教え手でもあり、互いに学び合うことができる存在として、子どもの学び合いの場に生じるコミュニケーションに着目した研究が行われるようになった。桐生は、学習者に課題を与え、自主的な活動を保証したとき、一見、課題とは無関係な会話や行動が生じることを指摘している。さらに、そのような会話や行動を詳細に分析した結果、課題とは完全に無関係なわけではなく、その会話の中に質の高い学びが生起していることを明らかにしている。また、そのような会話や行動を通して、子どもはより良い人間関係を形成している²⁾ことを明らかにしている。

島田は、大学生の私語を対象にした研究を行い、集

団レベルでの私語の人間関係生成維持機能を私語のプラス機能³⁾として挙げている。

そこで、本研究では、教師が学習者に学習目標を明示し、学習者間の自由なコミュニケーションを認めた上で生じる会話や行動の分析を行い、学習者間の関係変化とそれに伴う学びの変容を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 調査 1

(1) 目的

教師が学習課題を提示する際に語る内容によって、学習者の自由なコミュニケーションとそれに伴う学びの変化はみられるのか、その実態を明らかにする。

(2) 対象

沖縄県公立中学校2学年

総合的な学習の時間 2クラス(計73名)

(3) 期間 2001年9~11月

(4) 方法

参与観察を行い、各グループにテープレコーダーを1台置いて会話を記録し、ビデオカメラで授業過程を記録した。得られた会話・行動記録を、「教師の発話」「生徒の発話」「教師不在時のクラスの様子」を視点として分析を行った。

教師の発話は、「指示」「説明」に関するものを、生徒の発話は「判断」に関するものを取り上げ、その内容と発話数によって分析した。

(5) 結果

教師が学習課題の提示時に、学習目標を丁寧に説明して活動の期限を明示するが、方法や内容に関する指示を控え、学習中の自由なコミュニケーションを容認した場合、学習者は学習者間のコミュニケーションを活発に行いながら学習進度や活動内容を工夫し自主的、意欲的に活動した。したがって、教師不在時においても、クラスの学習状況が変化することは少ない。

しかし、目標や期限の明示がなく、教師が具体的な

指示を通して学習方法を提示すると、教師の評価が学習進度や内容を決定づけることになり、学習者は判断を求めるための対教師発話に基づいて活動し、教師の指示や評価基準以上の活動には消極的になった。また、教師不在時は課題から離れた。

2) 調査2

(1)目的

学習者に学習目標を明示し、特にグループ学習時の自由なコミュニケーションを認めた上で、活動内容の選択や進度の自由度をあげた場合に生じる会話や行動の分析を行い、学習者間の関係変化とそれに伴う学びの変化の実態を明らかにする。

(2)対象

沖縄県公立中学校 1 学年 理科

1 クラス (男子 17 名 女子 18 名 計 35 名)

(3)期間 2002 年 4 ~ 6 月

(4)手続き

単元開始から第 2 時までには人間関係づくりの活動として他者紹介と、話し合い活動への意識を高めるための自己モニター⁴⁾を行った。

男女混成 4 人グループを編成し、学習者同士が積極的に関わることを勧め、それに伴う立ち歩きや会話は容認した。

(5)方法

授業者として参与観察を行い、各グループにテープレコーダーを 1 台置いて会話を記録し、ビデオカメラ 2 台で授業過程を記録した。その記録は次の視点で分析した。

単元開始から 1 ヶ月間の会話・行動記録からグループ内の関係変化と学びの変容を分析する。

で述べる段階変化の後、2 ヶ月間の関係変化と学びの変容を分析する。

(5)結果

開始当初のグループ内会話は、1 ~ 2 人のリード役が会話のきっかけをつくり、それに対する意見が 1 つ出れば、検討もないままにグループ意見として決定する「同調」タイプが多かった。次段階として、活動中に聞き手を限定せずに感情的な内容を含んだ「つぶやき」が現れた。これがグループ内で拾い合われることにより課題に関する会話へと展開される。また、次第に全員参加の課題関連の話題も雑談も行われていく「交換」へと移行した。

単元開始当初は課題に関する会話が多かったのに対し、次第に課題に関しない会話の割合が増加するが、課題に関する会話と課題に関しない会話の割合は、全員参加の場合、部分参加の場合においても 5

割を切ることは少なかった。また、活動自由度の高い課題が与えられた授業でも同様であった。

課題に関しない会話に移行する状況とは、理解や技能の程度に個人差はあっても、グループ内において目標そのものや課題達成に向けた活動内容の共通理解を図る関わりがもてない場面で生じやすい。さらに、共有を図る関わりとは、会話内容を自在に変化できる関係に至ったグループにおいて生じやすく、目標や活動内容の共通理解が図られた時点で会話や行動が課題に関するものへと戻っていく。そのようなグループに対しては、教師の発話も生徒の「判断」発話に対する端的な指示と進捗状況の確認、生徒発話に対して指示ではなくその判断は任せるという意での確認の発話を中心となる。生徒の対教師発話も減少する。

分析の詳細は当日発表とする。

3. 結果と考察

学習者の発言・行動は、教師の学習目標や学習方法の提示にまつわる言動、ひいては教師の学習観・指導観に影響を受けることが明らかになった。また、学習者は、グループ内会話の「同調 つぶやき 交換」という段階変化に伴って、課題解決的場面に限らず、一見すれば非課題解決的な言動を取る場面でさえも、相互に影響し合い目標や活動を共有でき、個々人の学習意欲やアイデアを具現化する場を持ち得ることが推察できる。

4. 今後の課題

調査 2 におけるグループ内会話の段階変化後の関係変化と学びの変容に関する分析を行い、その過程を明らかにすることで、学び合う集団形成の要因について迫りたい。

[参考文献]

- 1) 稲垣佳世子・波多野諠余夫：人はいかにして学ぶか 中公新書 PP.7-20 1989
- 2) 桐生徹：異学年学習形態を用いた教科学習に関する研究 上越教育大学修士論文 2002
- 3) 島田博司：私語の誘惑と人間関係 六甲出版 PP.216-217 1999
- 4) 河合千尋：小学生の理科学習における話し合い活動に関する研究 上越教育大学修士論文 1999
- 5) 西川純：学び合う教室 東洋館出版 2000